



退職に寄せて

飯 盛 和 代

現在の専門学校がある多布施の地にあった研究室から神園に建築された5号館の研究室で過ごすようになったのはついこの間のような気がする。この研究室も間近に解体され、そして私もこの春退職する。長い間、研究と教育が出来たことに感謝している。所属学科や担当科目は色々と変わり、そのたびに科目担当者にふさわしい教員になるように努力した。

2009年に新たな子ども学部の設置があり、教授として勤務することになった。この学部は将来、子どもの教育に携わる人材を育成する学部であり、責任の重さを感じた。

新学部長の香川先生は学部立ち上げの際には苦労が重なり体調を崩され、心配した。先日、総合研究室を訪ねた時、部屋の前にある掲示板を見ながら、大学らしくなった子ども学部の誇らしく思い、あらためて学部長はじめ諸先生方に感謝した。

私は主に「地球環境科学」と「地域環境演習」を担当することになった。これらの科目は持続可能な人間社会の構築を目的としたものである。地域の再生、発展を担う人材の育成、環境に負荷をかけないライフスタイルに向けての幅広い視野を涵養し、教育分野のみならず企業においても役立つ内容とした。

「地域環境演習」の授業も終り近くになったころ、学生が故郷の自然環境、産業、水、大気等に関わる身近なことから「環境」をテーマに、発表会をおこなった。誇らしげに発表するいつものとは異なった学生の姿に驚き、双方向授業の大切さを感じた。残念ながら平成25年度入学生からこの科目は廃止となった。

学園初代理事長永原マツヨ先生は教育と研究に同じウエイトをおかれていたように思う。常に新しい研究に取り組み、教育のために研究が有り、学会で発表されてはそれを学生に還元されていた。この姿勢に感銘を受けたことが私のこの学園での教育研究の原点になった。教育に生かせる研究を常に心がけ、身近なところに多くの研究テーマがあることを教えられた。勤務当初は、常勤の化学系教員は私一人であった。それまでの研究が全くこの学園の教育とかけ離れてはいなかったが、できるだけ担当科目の教育内容に近いテーマで取り組むことにした。しかし、研究費はほとんどないことがわかった。そんな折、学会誌に牛乳に関係した研究に研究費を援助するという内容のことが掲載されていたので、早速テーマを決め応募したところ採択された。金額はそれほど大きくはなかったが本当に嬉しかった。なんとか一応の定量分析用の器具をそろえることはできたが測定機器の分まではなかった。そこで出来るだけ機器を用いない実験手法を考案した。それにも限界があり、思案の末、色んな研究機関に助けを求め測定機器を使用させてもらい、成果を学会に発表し、論文を書いた。常に「無から有を生み出す」というところであり、研究テーマは工夫次第で何とか見つけることが出来ると思った。

現在、大学には色んな測定機器が設置されている。当時を思えば羨ましいと思うこともあるが、今後の研究の発展に期待するところが大きい。

佐賀短期大学紀要第1号が発刊されたのは1967年のことである。二代目理事長福元文香先生の尽力によるところが大きい。大学の教員にとっては研究業績が大切であり、当然、学会論文が必要であるが、「若い先生方がすぐに学会投稿となると難しいので、まず学園紀要で論文の書き方を学ん

で欲しい」そして「適当なアドバイスによりできるだけ掲載するようにして下さい」と言われた。当時はまだ他人の論文を添削するほどの力量はなかったが出来るだけの努力をした。かなり長い期間、大学・短期大学の紀要の編集を担当し、原稿集めに奔走した。福元文香先生の主な担当科目は食品加工であった。食材を常に有効に活用することを心がけられた。食材を加工することにより、その食材は新たな物へと変わる。いくつかを印象深く覚えているがその中でもきゅうりの卵の花漬は話題性があった。きゅうりは夏場にたくさん手に入り、また卵の花は色々な調理に用いられるが、廃棄される量も多い。そこでこの廃棄物となる卵の花にきゅうりを漬けたらいいのではという発想であった。この結果については当時の朝日新聞に取り上げられた。まさに、現在よく耳にするエコクッキングであった。

子ども学部を設置の際には三代目理事長である福元祐二先生が建物、教員人事そして教育内容に至るまで全ての面で尽力された。教員は「学生の立場に立った教育を」ということをよく言われている。つい最近、生化学の授業の一部を担当された。多忙な中であっても教育に対する情熱を持ち続けておられる姿に敬服した。先生は常に前向きで、学園の発展を考えておられ、日々いとまがない。

大学は常に前進し、改革を必要とする時が来る。その際には教員は科目担当者としての適格審査を受ける。佐賀家政大学（現西九州大学）の設置申請という大変なことを経験し、これから多くを学びその後の勤務に大きく影響した。

子ども学部も大学院の設置の予定がある。最近では大学の質、保証ということを今まで以上に聞くようになったが、これは教員の質、保証でもあると言われている。大学の教員の資格審査は担当科目に見合った業績が必要であり、大学の研究紀要に掲載された論文のみでは研究業績として認められない。文系のことについてはよくわからないが理系の場合は学会の厳しい審査を経て掲載される学会論文が要求される。教員は学園の紀要も育てなければならないし、学会論文の掲載も必要であるため両方に執筆することが必要になる。

間近に学園70周年を迎え記念誌の発刊に向けて動き出している。50周年の時には記念誌と同時に紀要の記念号も発刊された。論文に加え、第1号からの投稿論文名と投稿者名の目録も記載された。70周年には紀要の記念号の発刊は予定されていないが、またいつの日か記念号が発刊されることを期待している。

勤務当初は大学に居れば好きな研究ができるという安易な考えであった。しかしそれは大きな間違いであった。大学における学生の存在は非常に大きく、教育の責任は大きい。「精一杯の努力をしなければ」と自分を励ますことも多くあった。しかしどうしても約束を守れず、期限内にレポート提出が出来ない学生もいた。最後の授業を終えた今も教育の難しさを痛感している。つい先日、研究室の机から卒業生が残した懐かしい走り書きが出てきた。「佐賀のお母さんただいま、今帰って来ました」というのがあった。これは10年ほど前の一学生の伝言メッセージであった。遠く実家を離れての学生には教員であると同時に親としての役目も必要な時もあった。遠方より来ている学生の中には時折、精神的に、かなり追い込まれる学生がいる。子ども学部にも色々な学生が居り、何を訴えたいのか理解することが難しいときもあったが、気持ちを通じあえたときは嬉しかった。

ほとんどの時間を実験室と研究室で過ごした。実験は事故と背中合わせであり、特に学生実験では「安全」に心がけ、事故がないように注意した。これまで一件の事故もなく勤務を終えることができることに安堵している。

卒論発表の練習を終え、実験室を出て行く学生の将来に期待しながら「体大切に、頑張ってね」の言葉を贈った。

子ども学部の今後の発展に期待を寄せている。